



2014年4月9日放送

頻用処方解説 四物湯①

大分大学医学部附属病院 漢方外来

織部内科クリニック 院長 織部 和宏

今回から3回にわたり四物湯をベースにした方剤の当帰飲子、温清飲、そして竜胆瀉肝湯について、お話させていただきます。

まず、ベースになる四物湯ですが、原典は中国・北宋時代の『和剂局方』(1102-06)です。四物湯と名付けられているのは、構成生薬が当帰、川芎、芍薬、地黄の4味からなっていますので、四物湯とっております。

使うポイントですが、まず気血水の血虚から理解する必要があると思います。漢方の中で、血とは中医学でいうところの濡養作用とあって、「濡」は潤す、「養」は栄養を与えるということですから、血の働きは体に栄養と潤いを与えるということになります。その血の働きが落ちたのが血虚というわけで、四物湯はその血虚を治す代表的な方剤です。

では、体から栄養と潤いが失われたらどうなるのか？ということですが、一つは体が非常に痩せてくるということです。そして、栄養が末端まで行き届かなくなると、特に皮膚はカサカサになって、いわゆる乾燥してくるということです。それがひどくなると、痒くなってきたりします。

髪の毛に栄養が行かないと、髪は細くなって茶色っぽくなり、抜け毛が増えてくるということになります。目に栄養が行かないと、目がコロコロして最近いわれているところのドライアイになってくるわけです。唇は当然カサカサになって乾燥してきて、口の中も何となく乾いてきます。爪になると、十分な栄養が行きませんので、爪がもろくなってちょっとした事で欠けやすくなるといったことが肉体的に現われてまいります。

特に婦人において、生理の異常として出てくることが多く、生理の血液量が少ないとか、

すぐ終わってしまうという異常が出てきやすくなります。いわゆる貧血っぽくなってくるわけです。

そこで、四物湯は婦人のいろいろな疾患を治す聖薬といわれていて、一般的には貧血傾向があり、生理の不調、交感神経と副交感神経のバランスが崩れてきているような病態に用います。

適応は、月経異常、不妊症、血の道症、産前産後のいろいろな疾患（産後に下半身が弱ってきたとか、舌がただれるとか、これは舌に十分な栄養が行かない、潤いが行かない結果おこるわけです）、それから皮膚病（皮膚が乾燥すること）、痿躄（下肢の運動麻痺、足に十分な栄養が行かない）に応用されるわけです。

ただし、四物湯に入っている地黄は日本人には胃にきやすいことがあり、他の漢方薬と合方して用いられることが多く、日本では四物湯単独で用いられることは少ないようです。その結果として、四物湯をベースにして数種類の生薬や方剤を合方していくつかの薬が作られています。まず、皮膚科領域では当帰飲子です。乾燥肌の人は、冬になってお風呂に入った後や、布団の中で温まると背中などの皮膚が非常に痒くなってきます。お年寄りには特にその傾向がみられます。病名としては老人性皮膚掻痒症です。その代表薬が当帰飲子で、これは四物湯と同様にエキス剤があります。

当帰飲子は、上述した四物湯（当帰、川芎、芍薬、地黄）をベースに、蒺藜子、防風、何首烏、荊芥、黄耆、甘草を入れた内容です。四物湯をベースにして、皮膚に潤いを与えながら皮膚の痒みや湿疹など炎症的なものを治していく方剤です。

応用範囲は大変広く、西洋医学ではこのような病態には抗アレルギー剤、抗ヒスタミン剤が使われますが、これらの薬は服用すると口が渇いたり、眠くなるとか、きつくなるとか、気力を損なうといった副作用があります。中でも問題となるのが、眠気と口の渇きです。ただでさえ、お年寄りの方は皮膚が乾燥する、体力がないところに、こういった抗アレルギー剤を飲むと眠気がでて日中ふらふらして転んだりすると大変危険です。

それに対し、当帰飲子はそのような眠気もこない、ふらつきもこない、口も渇かないので、ご高齢の方の皮膚掻痒症や湿疹には非常におすすめです。

この皮膚掻痒症の特徴は、温まったり、特に冬場空気が乾燥してくると非常に悪くなりやすいという特徴があります。湿疹の性状は皮膚の乾燥がベースになるので、分泌物が少なく皮膚がかさかさしていて、炎症的な赤みもあまり多くありません。熱があつて赤みがあるときには、これに黄連解毒湯をかぶせるといいわけです。あくまでも痒みと乾燥が主体であるということです。

江戸の末期から明治 20 年台まで活躍した漢方の名医浅田宗伯（1815-1894）は『勿誤薬室方函口訣』という本を残していますが、この当帰飲子に関しては「この方は老人血燥よりして」（ご高齢の方が血虚をおこして皮膚が乾いてきて）「瘡疥を生ずる者に用ゆ」（いろいろな湿疹が出たときに用いる）「もし血熱あれば」（炎症性で赤くなって熱を持っていれば）、後に説明する温清飲にきなさいと言っています。温清飲は四物湯に黄連解毒湯を混ぜ

たような内容です。もし、この当帰飲子で上手くいかないときに、それでもベースに血虚があるときには、荊芥や浮萍を用いなさいとっています。

当帰飲子は私のクリニックでも皮膚科で貰った薬がなかなか効かないとか、眠くなるといったご高齢の方で、冬になると特にお風呂に入った後とか、夜、布団で温まると痒くなるといった方が紹介されてきますが、この当帰飲子を使っていると非常に効果があって、患者さんから大変喜ばれています。そういった意味で、この当帰飲子を覚えておくと先生方にとって非常に有効・有用な経験をする方剤です。